



TITLE:

第三史觀の概念(上)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 第三史觀の概念(上). 經濟論叢 1935, 40(2): 337-354

ISSUE DATE:

1935-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130560>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號貳第 卷十四第

行發日一月二年十和昭

論 叢

第三史觀の概念……………

文學博士 米田庄太郎

地方間課税に於ける住所對財源……………

法學博士 神戸正雄

地方財政調整指數……………

經濟學博士 汐見三郎

時 論

増税は景氣の芽を摘むか……………

文學博士 高田保馬

貿易統制としての爲替清算制……………

經濟學博士 谷口吉彦

研 究

フランスの獨立償還金庫に就いて……………

經濟學士 松岡孝兒

貨幣自體の限界效用……………

法學士 正井敬次

說 苑

公債制度の社會的條件に就て……………

經濟學士 島 恭彦

小農經濟理論より見たる地代……………

經濟學士 山岡亮一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

經濟論叢

第四十卷 第二號 (通卷第貳百參拾六號) 昭和十年二月發行

論叢

第三史觀の概念(上)

米田 庄太郎

- (一) 高田博士の第三史觀の概念に就て、
(二) 嚴密な論理的意味に於ての第三史觀の概念の一般的規定

一 高田博士の第三史觀の概念に就て

觀念史觀(觀念論的史觀)と、唯物史觀(唯物論的史觀)としてのマルクス主義經濟史觀との兩者に對して、新たに一定の史觀を唱へ出した人々は少なくないが、併し私の知る範圍内にありてはかゝる人々の中に於て自分の創說せんとする一定の史觀を、特に第三史觀と稱して居る人は高田博

士の外にはない様に思はれる。それで此處に私自身が主張しようとする第三史觀とは如何なるものであるかを、一般的に論述せんとするに當つて、先づ高田博士の第三史觀の概念を批判的に考察することは、必要であれば又論述上便宜でもあり、更に同博士に對する禮儀でもあると思ふ。但し私は此處で、同博士が第三史觀として創唱される社會學的史觀なるものの實質的内容其物に就て、別に批判を加へんとするのでなく、只私が嚴密な論理的意味に於て第三史觀と稱せらる可きものと考へる其の第三史觀の概念は、學問論上一般的に如何に規定さる可きかを論述せんとするに當つて、上に述べしが如き意味にて、高田博士が自分の創唱される社會的史觀を、第三史觀と稱せられて居る其の第三史觀の概念を、少しく検討して置きたいと思ふだけである。

今高田博士が其の創說された社會學的史觀を以て、第三史觀と稱せられる理由、つまり同博士の第三史觀の概念の眞意は、先づ大正十四年出版の博士の著書「階級及第三史觀」第四章「經濟史觀より第三史觀まで」の始め、及び同第五章「第三史觀」の始めに述べられて居る左の如き言葉によりて、一般的に學び得られると思はれる。

「私が茲に第三史觀と名づけるものは社會を中心とする歴史の説明である。觀念又は精神を原因として歴史が展開せられると見たる精神中心の歴史觀に對立して、經濟の變動により一切の社會的事象の變動が行はれると考へる經濟史觀又は唯物史觀（私は唯物史觀或は社會的唯物論と云ふ名稱をば頗る誤解を招き易き、不當のものであると考へてゐる、然れども、從來の學界の慣はしに従ひ、此二つの言葉の、何れをも用ひたい）が成立した。前者を第一史觀と云ふならば、これは第二史觀である然るに私は歴史の變動が究局する所精神によりて生ずるものに非らずと見る點に於て經濟史觀と同一ではあるが、更に進みて

此變動の原因を經濟の發達に求めず、社會の中に求める點に於て云はゞ第三の立場に立つ。従ひて私の史觀を名づけて第三史觀と云ふ。かくて第三史觀は之を語を換へて云ふ時、社會中心史觀である。或は之を社會學的史觀であるとも云ひ得る」。(二一七—二一八頁)

「私は唯物史觀又は經濟史觀を認めない、況んやまた唯心史觀即ち觀念中心の歴史觀を信するものではない。私は今、少なくも歴史の統一的説明をなすと云ふ意識を以て企てられたる最初の歴史觀即ち觀念史觀、これに代らむが爲めに生じたる經濟史觀の云はゞ第一、第二の史觀に對して、第三の史觀を抱く。私の抱く第三史觀と云ふは社會中心の史觀である。私は假りに之を社會學的史觀と呼ぶ。」(三〇六及び三〇七頁)

右に引用せる言述によりて見れば、高田博士は觀念史觀を第一史觀と稱し、之を否定し、之れに對立する唯物史觀中、特に經濟史觀を第二史觀と稱し、そうして博士が創說せんとされる史觀は、觀念史觀を排斥し、觀念或は精神を以て歴史的事象の原因とは認めず、物質或は自然を以て夫れと認めるに於ては、矢張り經濟史觀と同じく唯物論的なもの、即ち一種の唯物史觀であるが、併し經濟を分析して、更に經濟以上のものに遡り、經濟以上のものに於て歴史的事象の原因を探究し、そうして之を社會に於て發見せんとするものであると云ふ意味に於て、即ち經濟史觀に對して社會中心史觀或は社會學的史觀であると云ふ意味に於て、第三史觀と稱せらる可きものであると、考へられて居るのであることが、察知されるのである。約言すれば高田博士は自分の史觀は唯物史觀の一種であるが、併し經濟を以て直ちに歴史的事象の原因であると認めるのではなく、更に經濟の奥底に儼存するもの、即ち社會を以て夫れと認めるのであるが故に、近來一般に唯物史觀と同一視されて居るマルクスの經濟史觀とは異なり、夫れよりも一層深奥なるもの、つ

まり經濟史觀を唯物論的に一層深めて、夫れの次に發展せるもの、かくて觀念史觀を第一番目に發展せる史觀、唯物史觀としての經濟史觀を夫れに次で第二番目に發展せる史觀とすれば、自分の社會學的史觀はやはり唯物史觀であるが、併し經濟史觀の立場を唯物論的に更に一層深化し、夫れに次で第三番目に發展させた史觀であるが故に、第三史觀と稱せらる可きものであると、云はれるのであることが察知されると思ふ。

高田博士が自分の創說せる社會學的史觀を第三史觀と稱せられるのは、つまり夫れは右に述べしが如き意味にて、第三番目に發展せる史觀であると云ふ意味であること、即ち主として時間的發展の順番に於て第三番目に位する史觀であると云ふ意味であることは、右に述べし如くに同博士の著書、「階級及び第三史觀」中に收められて居る處の、第三史觀に關する同博士の最初の二つの研究によりても、大體上推察されると思はれるが、尙ほ同博士の最近の著書「國家と階級」（昭和九年十月出版）中に見出される左の言述によりて、此の事が一層明かに了解されると思はれるのである。

「私の歴史觀を以て精神史觀と唯物史觀とに對する第三のものと見る見解がある。これは正しい解釋でない。形而上學的又は哲學的立場としては觀念論的立場と唯物論的立場との外に第三の立場をつけ加へうる餘地はないはずである。私見が第三の史觀であると云ふのは、社會的意識形態の動きを歴史の運動の原因とするもの、經濟の動きを歴史の運動の原因とするもの、即ち精神史觀、經濟史觀に對して社會史觀が第三の史觀であるとする意味に於てである。従つて精神史觀と唯物史觀とを並立せしめてみようとするならば、その場合の唯物史觀の中にマルクスの史觀と等しく私のとる史觀も含まるゝはずであると思

ふ。私がマルクスの史觀を肯定し得ないのは社會的存在が意識を決定すると云ふ根本の立場を誤れりとするからではない、たゞ社會的存在が如何にして動くかと云ふことの見方に肯定し得ざる、事實の眞相と相容れざるものがあるからである。」(六三頁)

却說以上述べ來りし處によりて、高田博士の第三史觀の概念は大體上如何なるものであるかゞ學はれると思ふが、要するに同博士は嚴密な學問論的或は論理的意味に於て、第三史觀の概念を構成されて居るのでなく、又かゝる意味にて第三史觀の概念を構成せんとされるのでもなく、觀念史觀の種々様々な諸形態を總括して、之を史觀の歴史的或は時間的發展の順序に於て、先づ第一番目に發展せるものと看做し、次に唯物史觀の諸形態中特にマルクス主義經濟史觀を以て第二番目に發展せるものと見做し、そうして自分の社會學的史觀はマルクス主義經濟史觀と同じく唯物史觀の一形態であるが、併し夫れ以上に深奥な唯物史觀の新しき一形態として、自分は夫れに次で第三番目に發展させたものであるが故に、第三史觀であると云はれるのであるかと思はれる。尙ほ同博士の第三史觀の概念の眞意は、左の如き表によりて最とも簡明に表示し得られるかと思はれる。

史觀の歴史的或は時間的發展の順序

第一番目の史觀即ち第一史觀 觀念史觀の一切の諸形態

第二番目の史觀即ち第二史觀 唯物史觀の諸形態中特にマルクス主義經濟史觀

第三番目の史觀即ち第三史觀——唯物史觀の新しい一形態としての社會學的史觀

高田博士が自分の社會學的史觀を、第三史觀と稱せられる其の第三史觀の概念の眞意は、つまる處右に述べしが如きものとならなければならないかと思はれるのであるが、そうであるとする、同博士が第三史觀の概念構成の基礎とされる處の、史觀の歴史的或は時間的發展の順序の定め方に就て問題が起つてくると思はれる。高田博士が史觀の歴史的・時間的發展の順序に於て、觀念史觀の一切の諸形態を第一番目の史觀或は第一史觀として總括されることの是非はとにかくとして、第二史觀としての唯物史觀の諸形態中、特にマルクス主義經濟史觀を直ちに第二史觀と同視されて居るのは問題となるであらう。併し夫れも此處では問題とせずに置き、此處では只マルクス主義經濟史觀を直ちに第二史觀としての唯物史觀と見做すとしても、博士がヤハリ唯物史觀の一形態である自分の社會學的史觀を、直ちに第三番目の史觀或は第三史觀と見ようとされることが、果して正當であるや否やに就て、少しく述べるだけに止めて置く。

高田博士が第三史觀と認められる同博士の社會學的史觀の實質的内容に就ては、上に述べし如くに、私は本論文に於ては之を論評しないつもりであるが、併し同博士自身の見地から考へるも、同博士が其の社會學的史觀を第三史觀と認められるのは、果して正當であるや否やを考察するには、已を得ず其の實質的内容にも少しく觸れなければならない。

先づ高田博士は、第二史觀としてのマルクスの經濟史觀から、第三史觀としての博士の社會學

的史觀へ、如何にして到達されたかを考察するに、「階級及第三史觀」第四章及び第五章の始めに、此の點に就て博士は左の如くに述べられて居る。

「私が此考へを抱く事は十二年の昔に遡る。私はマルクスの經濟史觀から此の歴史觀に到達した。近年ヅウルケムの「原始宗教論」を読み、またジューメル「社會學の根本問題」を入手するに及びて、私見の必ずしも一個の獨斷に非ず、此等の學者の見解の中にも共通する考へ方の認めらるゝ事を知るに至つた。私は此の新に得たる知識を以て當年の考へを一層明確にせむとの目的を以て此小篇の筆を執る。(二一八頁)

尙ほ同頁及び次の頁に亘る(註)の中に述べられて居る處によりて、高田博士が其の獨創的な社會學的史觀の考へを抱くに至られたのは、ヅウルケムやジューメルの説の影響によつてではなく、其等の人々の著作に接する以前に、既にマルクス主義經濟史觀の批判的研究からして直接に其の考へを抱くに至られ、後に其等の人々の著作を読んで同様な思想を其の中に見出されたのであることが學ばれ、又其の獨創的な社會學的史觀を始めて建設された當時の博士の心境を、推察することが出来る。併し私が此處で特に注目したいのは、現代の社會學發達史や現代の史觀發達史の上から、學史的に全般的に考察すると、マルクスの經濟史觀から高田博士の社會學的史觀の如きものに到達するまでには、其の間には思想上カナリの距離があつて、そうして其の距離は如何に非凡な學者と云へども、獨力で直ちに飛び越へることは、甚だ困難であらうと思はれることである。かくて私は高田博士の見方に従ひ、諸種の唯物史觀の中から特にマルクスの經濟史觀を抜き出し、之を第二史觀と稱するとしても、高田博士の如くに、博士自身の社會學的史觀を以て直ち

に第三史觀と稱することは適當であるまいかと思ふ。換言すればマルクスの經濟史觀と高田博士の社會學的史觀との間には、學史的に考察すれば、若干の史觀が既に發展して居る可き筈で、又實際上發展して居たので、そうして其等の史觀にも學史的に一定の意義を認めるならば、高田博士の立場から見ても、博士自身の史觀は直ちに第三史觀と稱せらる可きものでなく、第四史觀とか第五史觀とか稱せらる可きものであるまいかと思はれる。尙ほ又かくの如くに博士の史觀を第四史觀とか第五史觀とか見ることは、博士の立場から見ても、博士の史觀の價值を益々充分に發揮することになるのではあるまいかと思はれる。そうして此處に此の事を明かにする爲めには、先づ博士の社會學的史觀の根本思想を少しく考察することが必要である。

私の見る處によれば、高田博士の社會學的史觀の最とも根本的な思想は、つまりマルクスの經濟史觀の最とも根本的な思想を批判して、同博士が確立せんと企だてゝ居られる左の二つであるかと思はれる。即ち其の一はマルクスの經濟史觀の如くに、生産關係を以て直ちに社會關係と同一視し、或は之を原始的社會關係であるとか、社會關係の眞髓であるとか考へるのは、偏狹な見解にして、生産關係の奥底には一般的社會關係が儼存し、生産關係は夫れの特種な派生的一形態として、結局夫れに還元して把握さる可きものである、隨ふて生産關係を以て一切の社會的歴史的事象の原因と認め、先づ只夫れによりてのみ一切の社會的歴史的事象を根本的に説明せんとするは正當でなく、一切の社會的歴史的事象は先づ社會關係によりて根本的に説明さる可きもので

あると云ふ思想、其の二は次にマルクスの經濟史觀の如くに、生産關係を以て全く受働的なものにして、之を動かす最根本的な原因は、自から運動する能働的な物質的生產諸力或は生産諸力であるとするか、又は逆に生産關係に能働性を認め、生産關係が生産諸力を動かすと見るか、又は生産諸力に對すると同じく生産關係にも能働性を認め、能働的な生産諸力と能働的な生産關係との相互的辨證法的作用を以て、一切の社會的歴史的事象の最根本的な原因と見るか、何れにもせよ、生産諸力や生産關係の能働性或は自己運動性を認めんとするは謬見にして、生産關係は一般的社會關係の一の派生的な特殊の形態として、一般的社會關係によりて動かされるものであることは云ふまでもなく、更に生産諸力も矢張りツマリは一般的社會關係によりて動かされるものである、併し社會關係其物も亦自から運動する能働的なものでなく、更に之を動かす最根本的な或物が存在せねばならない、そうして夫れは即ち「人口の増加、生命に内存する自己増殖の盲目的運動」(「國家と階級」六六頁)であると云ふ思想である。要するに高田博士の主張される處によると、一切の社會的歴史的事象の直接の原因は一般的社會關係にして、そうして一般的社會關係を動かす其の最後の原因は「人口の増加、生命に内存する自己増殖の盲目的運動」である。かくて一切の社會的歴史的事象の最根本的な原因は、盲目的に自己増殖する人口であるのである。

今高田博士の社會學的史觀の最根本的な思想は、右に述べしが如きものであるとすると、夫れがマルクス經濟史觀の最根本的な思想から發展する爲めには、先づ第一に一切の社會的歴史的事象の

基礎、或は一切の社會現象、社會的現實態の元素的事實は、人間と人間との關係としての社會關係であると云ふ思想が、社會學史上發達して居ることが必要である。そうして此の思想の淵源は随分遠い昔に遡つて發見されるが、併し現代社會學に於ては殊にタールドやジムメルを始めとして、ギッディングスや其の他多數の社會學者によりて大に發展され、高田博士が社會學を專攻し殆められた頃には、既に歐米の社會學界に於て最とも優勢を振ふて居たものであるので、かくて現代社會學發達史上から一般的に考察すれば、高田博士は直接にマルクス經濟史觀の生産關係の概念を分析し、批判して、獨力にて之を人間と人間との關係としての社會關係に還元されたのであると見るよりは、寧ろ右の現代社會學的思想を經濟史觀の生産關係の概念の分析及び批判に適用して、以て之を社會關係に還元されたのであると認める方が、より正當であらうかと思はれる。要するに經濟史觀の生産關係の概念と、之を社會關係の概念に還元しようとする高田博士の社會學的史觀の根本的一思想との間には、一切の社會現象或は社會的現實態の基礎或は元素的事實は、人間と人間との關係としての社會關係であると見る、現代社會學の發達上甚だ重大なる意義を有する一の思想の發達が狹まつて居るので、此の思想が發達して居なかつたならば、高田博士も經濟史觀の生産關係の概念を社會關係に還元されることは、困難であつたであらうと思はれるのである。

此處に一切の社會現象或は社會的現實態の元素的事實は、心と心との相互作用及び相互關係であるとする私の見解に就て、

少しく述べて置きたいと思ふが、今社會關係とはつまり人間と人間との關係であると云ふに止まる場合には、人類の外には社會は存在し得ないことになるので、かくて社會は人類特有のものとなるのである。併し全體人間と人間との關係とは根本的には何を意味するのであるか、或は人間と人間との關係は何によりて石と石との關係や、煉瓦と煉瓦との關係や、天體と天體との關係や、原子と原子との關係や、分子と分子との關係や、元素と元素との關係や、細胞と細胞との關係などと根本的に區別されるのであるかと云へば、夫れはつまり人間と人間との關係は根本的には心と心との關係を意味するものであるが爲めである。かくて人間と人間との關係とはつまり心と心との關係を意味するもの、隨ふて社會關係とは根本的には心と心との關係を意味するものとして、或は社會關係の眞髓は心と心との關係であるとして、社會關係は右に述べしが如き宇宙間の諸物の關係と根本的に區別されるのである。

然るに今社會關係とはつまり心と心との關係を意味するものであるとすると、人間以外の生物に於ても心の存在が認められる以上、社會關係は人類以外の生物に於ても存在するものと認めなければならぬ。そうして私は心を有する生物を總て有心物と稱するのであるから、かくて私は、抽象的に考ふれば、社會關係とは心と心との關係であると見ると同時に、具體的には社會關係とは人類を含む一切の有心物間の關係であると見るのである。但し私が心と稱するものと精神と稱するものとの區別や、又社會關係を單に心と心との關係と云はすして、更に心と心との相互作用及び相互關係と云ふ所以に就ては、此處で述べて居る暇はないから省いて置く。とにかく社會關係を心と心との關係、或は有心物と有心物との關係と認め、かくて社會關係は人類以外の生物に於ても存在すると認めることは、高田博士の如くに人口の増加を以て社會關係の根本原因と見る見解に對して、重要な意義を有するのである。併し此處では此の意義に付ても述べる暇はないから、やはり他日の機會に譲ることとする。

次に生産諸力又は生産關係又は兩者を、一切の社會的歴史的事象の根本原因と見るマルクスの經濟史觀の根本思想から、之を批判し排斥して、生産諸力も生産關係も決して夫れ自身で動くものでなく、何れも社會關係によりて動かされるものであるが、併し社會關係其物も亦自から成立し、自から動くものでなく、「人口の増加、生命に内存する自己増殖の盲目的運動」によりて成立

し、動かされるものであると見る、高田博士の社會學的史觀の最根本思想の如きものが主張されるに至るまでには、社會學的發達史上から考察すると、人口を以て社會の成立及び變動の甚だ重要な一因素と見る思想が、發達して居なければならぬ。そうして此の思想は現代社會學の發達上比較的早くから、ヅルケムやアドルフ・コストなどによりて特に強調されて居たことは、今日社會學を學ぶものの熟知して居る事實であると思はれる。併し人口の増加が如何にして社會の構造及び變動を惹起するかと云ふ問題、或は人口の増加が社會の構造及び變動を生ずる過程の問題に關して、高田博士は人口の同質性と異質性との關係を一定の仕方にて、特に重要視されることによりて、博士の説はヅルケム及び其の一派の社會學者や、コストなどの説とは異なるものとなつて居る。然るに此の人口の同質性と異質性との關係を強調する思想は、ギッディングスの社會學の最とも重要な根本思想の一にして、今日の米國社會學の發達は多くの點に於てギッディングスの説から離れて居るが、併し此の人口の同質性と異質性との關係を重要視するギッディングスの思想は、今日に於ても米國社會學の構成的一要素として保持されて居るもの、更に益々強調されて居るものである。是れ米國にありては此の人口の同質性と異質性との關係と云ふことは、比較的に人口の同質性の大きな我國に於ては、想像することが困難である程政治、上、經濟上、社交上、宗教上、思想上其他諸般の社會的事象上、實際に於て甚だ重大な意義を有する儼然たる事實であるからである。併し人口の同質性と異質性との關係に對するギッディングスの態度と、高田博士の

態度との間には、學問論的に嚴密に考察すると、微妙な併し重要な差異が発見されるところ。此處に此の差異に就て詳しく述べる暇はないが、要するにギッディングスが人口の同質性と異質性との關係を社會學上大に重要視して研究して居るのは、つまり人口の同質性及び異質性の度を種々の方面から科學的に、出來可くは統計的にも詳しく研究して、そうして夫れが根本的には社會意識或は社會心の構成及び動きの上に、更に諸般の社會的事象の上に、如何なる作用を及ぼし、如何なる結果を生ずるかを、科學的に又出來るならば統計的に確定せんが爲めであつて、かくてギッディングスの研究は大體上科學的なものであるが、然るに高田博士は歴史を徹底的統一的に説明し或は解釋することを目標とし、そうしてかゝる説明或は解釋の最根本原因或は原理として、人口の増加、即ち生命に内存する自己増殖の盲目的運動を措定し、更にかゝる根本原理の必然的結果として、其の原理と密接に結び附けて、人口の同質性及び異質性を考へ、かくて其の根本原理と同様に人口の同質性及び異質性をも、哲學的に取扱はれて居ると思はれるのである。(但し高田博士はそう考へては居られない様であるが、併し同博士が生命に内存する自己増殖の盲目的運動と認められて居る人口の増加、及び夫れの必然的な直接的結果と認められて居る人口の同質性及び異質性に就て論述されて居ることを、學問論的に嚴密に吟味して行くと、同博士の見解はつまりは一種の哲學的見解であるかと思はれるのである。此の事に付ては次の第二節の中に論ずることとする。)かくて高田博士は、人口の同質性及び異質性の概念をギッディングスから學ばれたと思はれ

るが、併し夫れからギッディングスとは大に異なれる結論を引き出し、同博士獨特の獨創的な一史觀を建設せんと企だてられたのであると思はれる。

甚だ簡單ながら以上述べし處によりて指示せる如く、社會的歴史的事象の根本原因を自己運動する生産諸力或は生産關係と見るマルクス經濟史觀の立場から、之を人口の盲目的自己運動或は増殖、更に夫れと直接に必然的に結び附いて居る人口の同質性と異質性との關係と見る、高田博士の社會學的史觀に到達するまでには、少なくとも先づヅルケム、コスト、ギッディングス等の現代社會學上重要な意義を有する諸説が、發達して居なければならぬのであるが、併し高田博士が自分の社會學的史觀を第三史觀と稱せられる、其の第三史觀の概念の眞意を究明する爲めに、私が更に直接に肝要な學史的事實として、特に注目す可きものと考へるのは、高田博士の社會學的史觀に先だちて、伊太利の一時著名な經濟學者、社會學者又社會主義者であつたロリアが、マルクス經濟史觀を批判的に推し進めて立説して居た一種の唯物史觀である。そうして私は高田博士の如くに、マルクスの唯物史觀としての經濟史觀を第二史觀と見るならば、ロリアの唯物史觀を第三史觀と見做し、高田博士の社會學的史觀を第四史觀と見る方が、唯物史觀の發展上に於ける同博士の史觀の眞價を、一層よく了解することが出来るのではあるまいかと思ふ。

ロリアの社會學説は、私は京都帝國大學に於ける私の初期の社會學講義中時々引用し批判せるものにして、私が智識階級を中間階級と見る其の中間階級の概念は、此の事を論述して居る私の論文中に指示して居る如く、私が彼の著書「社會形態學」中

の所説からヒントを得て構成せるものである。そうして高田博士も學生時代に於て、既にロリアの説を研究されて居た様に記憶して居る。

私は此處で、ロリアの社會學中に含まれて居る歴史哲學的見解、即ち史觀に就て、詳しく述べる暇はないから、只其の根本的思想を極簡単に述べ、現代史觀發達史上に於ける、一層詳しく云へば現代唯物史觀發達史上に於ける、夫れと高田博士の社會學的史觀との理論的發展的連絡を指示するだけに止めて置きたいと思ふが、要するにロリアは、一切の社會現象は經濟的事實に依存し、社會組織は經濟組織によりて支配され、決定されて居ると見る點に於ては、マルクスの經濟史觀を遵奉して居るのである。併しマルクスの經濟史觀に於ては、生産諸力或は生産關係が直ちに根本原因と認められて居るのに反して、ロリアは高田博士の如く更に之を分析して、より深く根本的な原因を探究せんと企だて、かくて土地と人口との結合的勢力、及び夫れの直接的必然的結果としての土地所有の諸様式を以て、一切の社會進化の根本原因と認め、人口の不斷の増加或は増殖は、利用し得られる土地の占有と相結合して、一定の年代を隔て、全經濟制度を完全に改更するものであると考へ、かくて人口的因素と土地的因素とか相合して、以て人間の活動の全體を支配し決定するものと主張したのである。尙ほロリアの社會學的史觀或は歴史哲學の眞意をより明かに示す爲めに、其の全體の輪廓を一般的に述べて置くが、彼はつまり人口と土地との種々様な結合、或は人間と土地との種々様な結合、及び夫れの直接的必然的結果としての土地所有制に於て、歴史の一切の祕密を開く鍵を發見したと信じ、かくて歴史の根本的な決定的

諸現象は、自由な土地の斷へざる減少と使用されたる土地の生産力の遞減、勞働者の手の勞働と資本家的財産との強制的な、効果の少なき結合、有産者階級と無産者階級とに於ける社會の分割、及び最後に有産者の所得が地代と利潤との競争的な二種の所得に兩分されること等にして、そうして此等の根本的な決定的諸現象に依存し、夫れの自然的結果として、道德、政治、法律、觀念的諸形態等が生まれ發達するものと考へたのである。但し彼は此等の諸般の社會現象が、徐々に一定の自律性を獲得して、經濟現象の上に反動し得ることをも認めたが、併し其の反動力はあまり強大なものでなく、又一時的に作用するだけに止まり、根本的には經濟的現象の決定的勢力を變更するものでないと考へて居たのである。

甚だ簡單ながら右に述べし處によりて、ロリアの歴史哲學或は史觀の根本思想を指示したと思ふが、夫れによりてロリアの史觀は、大體上マルクスの經濟史觀を遵奉する一の唯物史觀であることが學ばれると同時に、彼は生産諸力或は生産關係以上に遡り、人口と土地との一定の關係を以て、社會的歴史的事象の根本原因と認めることによりて、彼の史觀は高田博士の社會學的史觀に先だち、夫れと同じくマルクスの經濟史觀を一層深化して居ることが學ばれる。そうして夫れが爲めにマルクス主義者は彼の史觀はマルクス主義的ではないと批評して居るのである。併し現代史觀、殊に唯物史觀の發達史上から見て、彼の史觀に於て重要視す可きは、夫れがマルクス主義的であるや否やと云ふことではなくして、彼がマルクスの經濟史觀以上に遡つて、社會的歴史的事象の根本原因を探究せんと企だてゝ居たことである。そうして一方から見れば、彼は其の原

因を人口と土地との一定の關係に於て發見せんと企てたことによりて、彼の史觀は唯物史觀の發達上、マルクスの經濟史觀を一步踏み出し、高田博士に先だちて博士の史觀へ近づいて居るものと認められるが、他方から見れば、高田博士はロリアの史觀を、原因の單純化或は徹底的統一化と云ふ歴史哲學の方法論的原理から見て、更に一層推し進め、土地的因素を除去し、只人口的因素のみを唯一の根本原因として重要視することによりて、博士獨特の社會學的史觀或は人口學的史觀に到達されたのであると、見ることも出来ると思はれる。又そう見るのが學史的に考へてより正當であるかと思はれる。但し人口は事實上土地や社會組織と甚だ密接な關係を有するものにして、少なくとも土地との關係を離れ、空中に浮動しつゝ、盲目的に自己増殖するものでなく、かくてギッディングスも人口の増加や、同質性及び異質性の發達を科學的に考察するに當つては、常に根本的には土地との關係を忘れて居なかつたと思はれるのであるが、併し原因の徹底的統一化或は單一化を求める歴史哲學の方法論的原理から見れば、ロリアが人口と土地との關係を重要視するが故に、根本的には人口的因素と土地的因素との二因素を認めて居たのに對して、高田博士は只人口的因素のみを重要視されて居ることによりて、ロリアよりも一步進んだ見解を立てられて居ると、認めることが出来るのである。されば私は高田博士の見方に從ひ、マルクスの經濟史觀を第二史觀と見るに於ては、ロリアの史觀を第三史觀と見、そうして高田博士の史觀は、更に原因の統一化を徹底させたものとして、之を第四史觀と見る方が、同博士の史觀の眞價をより多く發揮することにならうかと思ふ。尙ほ高田博士の第三史觀の概念に於ては、上に述べし處により

て知られる如く、第三と云ふ事は相對立する二つのものが、總合されて構成される、論理的に完成されたる唯一のものを意味するのではなく、第一と云ふ事よりも第二と云ふ事がより大なる或はより多くの眞理價值を有する如く、第二と云ふ事よりも第三と云ふ事が、更により大なる或はより多くの眞理を有するものであると云ふ意味を、有するものであると思はれるのであるから、高田博士の史觀を第三史觀と見るよりも第四史觀、更に第五史觀とか、第六史觀とか見ることが出来るほど、益々其の眞理價值が増大し、發揮されるところと思はれるのである。

却説是れまで論述し來れる處によりて、高田博士が觀念史觀を第一史觀、諸種の唯物史觀の中で特にマルクスの經濟史觀を第二觀と稱し、そうして矢張り唯物史觀の一種である博士自身の社會學的史觀を、第三史觀と稱せられて居ることに就て、博士の第三史觀の概念の眞意を大體上究明したと思ふが、然るに私自身は高田博士とは異なり、第三史觀の概念を嚴密な論理的意味に解し、第三史觀とは普通に哲學上相對立する根本的の二方針と認められて居る觀念論と唯物論とを論理的に總合する處の、そうして私の立場からは、哲學の最高唯一の方針としての第三方針と思はれるものに基き、觀念論的方針に基いて建設されたる觀念史觀全體、及び唯物論的方針に基いて建設されたる唯物史觀全體を論理的に根本的に總合する史觀、かくて私自身の立場からは、最高唯一の史觀と認めらる可きものを意味すると解するのである。されば私の第三史觀の概念に従へば、第四史觀とか第五史觀とか云ふが如きものは全く成立し得ないのである。次節に於て私の第三史觀の概念を稍々詳しく論述することとする。(未完)